

ひろさちやの仏教流上司学（2）

ひろさちや

命令よりも説得が大事

「まんだら組織」のリーダーは、基本的に「添乗員」であるべきです。この「添乗員」というのは、パッケージ・ツアーに見られる「ツアー・コンダクター」のような存在だと考えてください。旅行をするのは、あくまでも旅行者である客です。コンダクターの役割は、観光客が楽しく、安全に旅ができるように、いろいろお膳立てをすることです。そして、旅行客が団体の秩序を乱すようなときには、勧告を発したりもします。それが添乗員の仕事です。それと同じように、「まんだら組織」の管理職の仕事は、部下が仕事をやりやすいように、周りの条件を整えてやることです。

仕事をするのは部下だということを忘れて、部下がやらない仕事を自分で片付けてしまう管理職がありますが、それは添乗員が自分で観光をやっているのと同じで、滑稽なことです。「まんだら組織」における管理職は、添乗員に徹底すべきなのです。

さて、上司が添乗員役になると、「命令」をするということができなくなります。「命令」の代わりに上司がすることは、旅行ツアーで添乗員が観光客に接するような「説得」になります。ツアー客がどんなにクレームを付けてきても、添乗員は説得して、相手を納得させますが、客に命令をすることはありません。この点からも、おわかりになるでしょう。

それでは、上司が行う「命令」と「説得」には、どのような違いがあるのでしょうか。「命令」とは、命令者が強権をもって相手の意見を放棄させ、自分の意見を相手に押し付けることです。それに対して「説得」とは、上司と部下がともに自分の意見を出し合い、互いに修正しながら、最終的に共通の見解をつくり上げることです。

つまり、「命令」というものは、命令者と被命令者の力関係に基づく強権発動といえますが、「説得」は、仲間意識に基づいてなされる「友情形成活動」と呼ぶことのできるものです。互いの努力でもって、共通の意見をつくり上げるのが「説得」なのです。したがって、「説得」には対立意識はありえません。というより、対立意識があっては「説得」ができないのです。これはとても難しいことだと思います。しかし、「まんだら組織」での上司は添乗員であって「命令」を使つてはいけなわけですから、部下を動かすには、どうしても「説得」によらねばならないのです。

結果第一主義の罪（結果だけを心配して人生を不幸にするな）

それでは、なぜ日本人は死後を楽しめないのでしょうか？

それは、社会全体が結果第一主義になっているからです。そもそも結果第一主義は、高度経済成長の時代、結果さえよければプロセスはどうでもいいんだ、という俗流哲学が横

行したことに始まります。経済が低迷している現在でも、残念ながら私たちの意識に根強く残っているのです。

会社においては常に業績を気にし、この社員においては仕事の成果が求められます。年俸制などを導入している企業では、社員の成果に対して厳しい評価が行われています。

それどころか、結果第一主義は教育現場にまで弊害をもたらしています。現在の日本の教育では、上級学校への進学を目的とした教育が平然と行われており、中学生はただ高校進学のみを目指してひたすら勉強し、高校生は大学受験を目指して勉強しています。中学も高校も、上級学校の予備校的な存在でしかありません。上級学校の入学試験に合格すれば、それで目標を達成したと思っています。果たしてこれで教育といえるのでしょうか。私たちは、結果を心配するあまり、人生を不幸にしているのではないのでしょうか。

フリーター、引きこもりが増加するのはなぜか

プロセスこそが面白い

私たちにとって何が大切なのでしょう。私たちは人生のいろいろな問題において、結果よりもむしろそこに至る過程（プロセス）を大事にしたほうがよいのです。プロセスを大事にすれば、毎日楽しく生きることができます。

大学を卒業したという結果よりも大事なのは、在学中にどのような活動を嬉々としてやってきたか、あるいは好きな勉強をしてきたかということです。会社員であれば、仕事に対してどんなやり甲斐を感じてやってきたかが大事なのです。プロ野球の試合でも、勝ち、負けの結果よりも、一球一打の試合の面白さのほうが大切です。私はそう考えています。

登山でもそうです。登り方によって、頂上までの間の楽しみ、頂上に立ったときの感激はずいぶんと違います。気象庁の長官などは、富士山頂の測候所を視察するとき、御殿場基地からブルドーザーで運び上げてもらいます。そうすると、登山の楽しみはおろか、頂上に着く頃には高山病にかかって、一時間も山頂にいられないそうです。

それに比べ、一般の登山客は、五合目まではバスで行きますが、そこから自分の足で登ります。自分の足で登った人はほとんど高山病にかかりません。五合目までバスで行った人は、ときに高山病にかかりますが、最初から自分の足で登った人が高山病にかかることはまずありません。ゆっくりと時間をかけて登れば、人間の体はきちんと高山に適応し、楽しみながら登れるのです。

このように、登り方の違いによって、頭痛に悩まされながら見る山頂風景にもなれば、すがすがしい気持ちで眺める風景にもなります。やはり、登り方（プロセス）が大事なのです。